

フィリピン研修参加報告書

京都大学文学研究科修士1年 吉田 絵弥

私は京都市の中学校で JFC (Japanese-Filipino Children、フィリピン人女性と日本人男性の間に生まれた子供たち)の日本語学習支援ボランティアを行っている。また、研修前の授業では来日するフィリピン人女性についての講義を受けていた。私の本研修での目標は、中学校でさまざまな問題を抱える彼らの生まれ育った国を実際に知ることと、フィリピンで渡航前研修に参加することで来日する人々の事情を知り、少しでも役に立つということであった。結果的に私はそこで期待していた以上のことを学ぶこととなった。

フィリピンについて最も衝撃が大きかったことを述べたい。フィリピンは、私にとっての初めての発展途上国であった。貧富の差の大きい国で、路上で生活している人々を毎日いたるところで見かけた。先進国のように発展した地区がある一方で、スクワッターも多く、車で移動していると街の景色はめまぐるしく変わった。

一度、橋の下の貧困コミュニティに行く機会があった。ひどい環境の中、多くの子供たちが暮らしていた。ゴミだらけで、手洗いはなく川にそのまま排泄をする。衛生環境は悪く、連れて行ってくださった NGO の職員の方によると、皆鼻水と腹痛を抱えていて、マラリアやデング熱といった感染症が起ることもあるとのことだ。最近男の子が病気で亡くなったとも言っていた。橋の下の家の中に入れていただいたが、まだ日中なのに真っ暗で初めは何も見えなかった。目が慣れてくると、狭いスペースに多くの小部屋があり、洗濯物が壁につるされているのや、部屋の中でバナナを揚げている女性がいるのが見えた。2 平方メートル程度のスペースがあり、そこに人が 3 人寝るのだと教えてもらった。それでもスペースは足りないの、夜男性は橋の上で寝ているそうだ。しかし、夜間車が通ると橋は揺れ、とても熟睡できるような環境ではないのだという。痩せ細った人も何人か見かけた。ドラッグ中毒になっている人がいるのだという。

コミュニティの人々の仕事は、空き缶を集めてリサイクルをする仕事や、個人でミネラルウォーターを仕入れて路上で売るような仕事しかない。稼げるのは一日せいぜい 200~300 ペソ (約 500~750 円) である。それで一家 5 人などが食べていかなければならない。フィリピンで掘立ではない家に住もうとしたら、最悪の環境のところでも月に 1500 ペソ、まともなところで最低でも 4000 ペソはかかるという。日々の食べ物にも困る暮らしなのに、払えるわけのないお金である。

フィリピンでは一部の富裕層が権力をにぎっていて、税制などの法律を自分たちの都合のよいものにしてしているため、貧富の差が大きいだけでなくその差が固定されてしまっている。階層間の流動性が低いのである。先に述べたように、フィリピンにはスクワッターが存在する一方で、先進国と同じようなきれいなショッピングモール、デパート、高級ホテルも多くある。社会福祉をもっとどうにかできないのかと憤りを覚えた。

研修先の CFO (Commission on Filipino Overseas) では渡航前研修に参加し、合計 4 度のプレゼンテーションを行った。プレゼンテーションは、英語で、楽しく、わかりやすく、という課題があったため、それ自体とても勉強になった。また、4 度機会があったということもよかった。繰り返すたびに新たな発見や反省点があり、プレゼンテーション能力は確実に上がったと思う。プレゼンテーションのテーマは、公共施設と公共機関の利用の仕方であった。公共施設では公民館や市役所、公共交通では電車やバスの乗り方・お得なきっぷを紹介した。日本の公共施設や公共交通のシステムはフィリピ

ンとは異なり、また複雑でわかりにくい。来日する人々の日本での活動の活発化のために、役に立てたと思う。

渡航前研修では、日本人男性と結婚して配偶者ビザで来日する予定のフィリピン人女性を中心に話を聞いた。私たちが一般的に健全と感じるような結婚は少なく、基本的に大きな年齢差があり、出会った場所もフィリピンパブか結婚のブローカーの紹介というケースが多い。年齢差に関しては、20代と70代が結婚するケースもしばしばあった。ほとんどがフィリピンと日本の経済格差に基づいた結婚である。中には、夫がデリバリーヘルスの経営をしているが女性はそれを知らないという事例もあった。女性の身の危険が感じられる事例だったが、必要書類が揃っていたため、CFOは結局渡航許可を出さざるをえなかったようだ。また、CFO職員によると、日本人男性とフィリピン人女性の結婚では、全体の60～70パーセントが偽装結婚を疑われる事例であるという。実際、話を聞いた中でも、CFOに提出する結婚式の写真が不自然だというような、明らかに偽装結婚が疑われる事例もあった。偽装結婚をした女性は、相手の男性に毎月5万円程度の金を渡し、日本のフィリピンパブ等で働く。そして3年たったら帰化して離婚するそうだ。

今回の研修は、ボランティア活動に関わりを持っているJFCの生徒の過ごしてきた環境や、授業で学習した来日するフィリピン人女性について、現地で実際に学ぶよい機会となった。JFCの生徒については、彼らがどのような国で暮らしていたのか知ることができたため、今まで聞いていた彼らの話をよりリアルに感じられるようになった。さまざまな疑問も出てきたため帰国して彼らの背景をより詳しく聞く必要があると感じた。また、グローバル化、少子高齢化が進む中で、フィリピンに限らず外国から日本に来る人は今後増えていくだろう。その意味でフィリピンから渡日する人々、という来日する外国人の一つの具体的な事例を知ることができたことは非常に有益であった。今後もボランティア活動とフィリピンから来日する人々についての学習は継続するつもりであり、そのために今回の研修は非常によい経験となった。